



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3573 号 2017.3.29 発行

ゲゲゲの妖怪焼き いかが 水木しげる生誕祭に障害者事業所が出店



福祉新聞 2017年03月27日 編集部
鬼太郎などの形をした妖怪焼き

水木しげる生誕祭が4日に鳥取県内で開かれ、東京都の社会福祉法人新の会（福田豊成理事長）がゲゲゲの鬼太郎のキャラクターをモチーフにした妖怪焼きを出品した。

妖怪焼きは、目玉おやじをモチーフにした白玉入りの鬼太郎（粒あん）や、砂かけ婆（カスタード）、ぬりかべ（焼きそば）など6種類あり、1個

160～210円ほど。会場でも反響が大きく、200個以上が売れたという。

妖怪焼きは、かつて水木さんが住んでいた東京都調布市で活動する新の会が、2010年に放送されたNHKドラマ「ゲゲゲの女房」に合わせて考案。普段は就労継続支援B型事業として、店舗や同市内のスーパーの駐車場などで、障害のある利用者が販売しているという。

販売車の前には時に行列もできた

生誕祭は、水木さんの生まれ故郷である境港市や鳥取県などが初めて開催。命日の11月末には毎年、調布市も催しを開いている。

新の会の山田なおみさんは「水木プロダクションや鬼太郎茶屋の協力があってこそこの取り組みであり、両市の絆を深める一端を担えたことに新たな価値を感じた。この縁を大切に、境港市にしかない商品の販売なども考えたい」と話している。



自閉症の少年の自立描く 米映画、4月公開



中日新聞 2017年3月28日
映画「ぼくと魔法の言葉たち」の主人公・オーウェン

自閉症の子が、ディズニーアニメを足掛かりに、コミュニケーションの力を伸ばし、自立へ歩んでいく姿を描いた米国のドキュメンタリー映画「ぼくと魔法の言葉たち」（ロジャー・ロス・ウィリアムズ監督）が各国で話題を呼んでいる。日本でも四月から東京、名古屋などで公開される予定で、支援者たちは「自閉症への理解と共感を高める作品」と期待している。

映画の主人公・オーウェンは、二歳のときに突

然、言葉を発しなくなった。医師から自閉症の診断を受け「一生言葉を話せないかもしれない」と告げられた。しかし、オーウェンが六歳のとき、彼の意味不明のつぶやきが、大好きなディズニーアニメ「リトル・マーメイド」のせりふであることに父親が気付いた。

父親がアニメに出てくるオウムの声色で語りかけると、オーウェンが返事をし、数年ぶりの会話が実現した。オーウェンはディズニーアニメの全場面を記憶していた。家族との会話が増えていくうち、自分の気持ちを伝えたり、相手の思いを察することも少しずつできるようになった。すべてアニメのキャラクターのせりふや表情から学んだことだ。個別支援教育を受けて入った大学では、ディズニークラブを主宰。卒業後は、障害者用アパートに一人で暮らし、働き、恋する喜び、別れのつらさも経験した。

有名なジャーナリストでもある父親の著書「ディズニー・セラピー 自閉症のわが子が教えてくれたこと」に感動したウィリアムズ監督が二年間かけて撮影し、ディズニーの許可を得て制作した。今年の米国アカデミー賞長編ドキュメンタリー部門賞の候補にもなり、話題を呼んだ。

オーウェンのように、突然言葉を発しなくなる症状は「自閉症の幼児の一部にみられる」と、辻井正次・中京大教授（発達臨床心理学）。映画の見どころについて「成長するにつれて新しい課題が出てくるが、社会の支援の仕組みがあることで、両親が安心して育てることができるし、オーウェンの前向きさが周りを元気にしている。アニメの逸話だけでなく、自立に向けた記録として見てほしい」と語る。

映画は四月八日から全国各地で順次公開される。劇場や日程は、「ぼくと魔法の言葉たち」のホームページ（HP）で紹介されている。世界自閉症啓発デーの二日午前十時からは、名古屋市中区のセンチュリーシネマで特別先行上映がある。自閉症の子を育てる作家堀田あけみさんらのトークショーも。参加費千五百円。申し込みは市民団体「アスペ・エルデの会」のHP内のセミナー申し込みサイトから。

◆ 2日に啓発イベント

同日は、東京タワーや名古屋・テレビ塔などが、自閉症の国際的なシンボルカラーの青にライトアップされるほか、自閉症の社会啓発を図るコンサートなどのイベントが各地である。（編集委員・安藤明夫）

障害者施設火災で入所者の女を鑑定留置へ 自室に放火容疑で愛媛県警が逮捕

産経新聞 2017年3月27日

愛媛県松野町の障害者施設「ひだまり I I I」で男女3人が死亡した火災で、松山地検は27日、現住建造物等放火の疑いで逮捕された入所者の善家千文容疑者（49）の鑑定留置を地検宇和島支部が宇和島簡裁に請求し、認められたと明らかにした。24日付で、期間は6月26日まで。

火災は今月12日未明に発生し、平屋の施設を全焼。亡くなった3人はそれぞれの個室で見つかり、自室の備品に火を付け全焼させたとして、県警が善家容疑者を逮捕した。

障害者の生活支援、大館に拠点施設 花輪ふくし会が設置へ



秋田魁新報 2017年3月28日
大館市清水に建設された障害者向け
地域生活支援拠点施設

秋田県鹿角市の社会福祉法人・花輪ふくし会（関重征理事長）は4月1日、県北で初となる障害者の地域生活支援拠点施設を大館市清水に開所する。本人や家族からの相談に応じたり、



就労支援を行ったりする多機能型事業所と、グループホーム3棟を1カ所に整備。障害者が住み慣れた地域で暮らしていけるよう包括的にサポートする。

国は施設や病院で暮らす障害者の地域生活への移行を後押しするため、支援拠点の整備や、事業者の連携による態勢づくりを自治体などに促している。県障害福祉課によると、県内では大潟村と由利本荘市で、既に取り組みが行われている。

ふくし会の新施設は、2階建ての多機能型事業所「ケアワークおおだて」に、入所者の就労支援を兼ねて運営する食事処（どころ）「とりびあん」と、精神障害者向けグループホーム（入所定員7人）を併設した。この建物で相談対応や短期入所、自立訓練などの福祉サービスも提供する。

高齢者、障害者の防災ラジオ 配布せず放置 河北新報 2017年3月28日

山形県米沢市の中川勝市長は27日の定例記者会見で、市が2015年度中に高齢者や障害者のいる世帯を対象に無料配布する予定だった防災ラジオ900台を、2年間にわたり倉庫に放置していたことを明らかにした。

災害発生時に緊急情報を受信する防災ラジオは15年3月、市に納品された。その後、配布対象の世帯が900を大幅に超えることが判明。土砂災害特別警戒区域など緊急性の高い地域の住民に対象を絞る方針に変更したものの、作業が進まず、配布しなかった。

会見に同席した危機管理室の担当者は「早めに配布すべきだったが、絞り込みが難しく先延ばししてしまった」と謝罪。新年度早々に対象世帯を決めて順次配布する考えだ。

この日初めて事態を知ったという中川市長は「財政が厳しい中、市民の方々に申し訳ない」と述べ、ずさんな対応にあきれた様子だった。

口からビー玉、入院患者への虐待疑い謝罪 京都・舞鶴市民病院



京都新聞 2017年03月28日

入院患者への虐待が疑われる事案が見つかった市立舞鶴市民病院（京都府舞鶴市倉谷）

舞鶴市立舞鶴市民病院（京都府舞鶴市倉谷）は27日、60代の男性入院患者2人について、体にあざや口の中からビー玉が見つかったと発表した。相談を受けた舞鶴署は虐待の疑いがあるとして捜査している。

病院によると、1人の患者は2月24日から今月11日の間に4回、手の爪に変色や、左脇や胸にあざが確認された。服用する薬剤の影響であざができやすかったが、短期間に複数できるのは不自然という。別の患者は12日の歯磨きなどの際、直径1・5センチの青色のビー玉1個が口に入っているのが見つかった。

2人は3階の同じ4人部屋にいて、寝たきりの状態だった。ビー玉が見つかった患者は25日に亡くなったが、病院は持病の悪化で今回の件とは無関係としている。院内には防犯カメラは設置されていないという。

看護師らへの聞き取りでは全員が関与を否定。舞鶴署には21日に相談した。入院患者や家族への説明を28日以降行う。井上重洋病院長は会見で「偶発か故意かは分からなかった。患者や家族、市民に不安な思いをさせて申し訳ない」と謝罪した。病院は医療療養型で100床。

病院前では、患者の家族から驚きや不安の声が聞かれた。市内の80代男性は「妻が入院しているが、いつも対応が良いので信じられない。悪い話は聞いたことがなく、本当だろうか」と驚いた様子。義父が入院している市内の50代女性は「義父の容体は良くないので不安だ」と心配した。

精神障害の啓発支援雑誌「こころの元気+」 当事者の声届け10周年

産経新聞 2017年3月28日

創刊10周年を迎えた「こころの元気+」3月号の表紙

NPO法人地域精神保健福祉機構（略称・コンボ）が、精神障害がある当事者向けに発行している月刊情報誌「こころの元気+（プラス）」が3月で創刊10周年を迎えた。

コンボは、精神障害者の主体的な社会参加の実現を目的に、患者、家族、医師らが平成19年1月に設立。同年3月から雑誌発行を始め、創刊号は「あなたの夢は何ですか？」を特集に掲げた。

毎号、当事者が表紙写真のモデルとなり、今月号の静岡県の友人3人グループを含め10年で計141人が登場した。

厚生労働省の患者調査（26年）によると、精神疾患で医療機関にかかっている人は全国で約392万人。認知症のほか、鬱病などの気分障害が近年増加傾向にある。

同誌編集長の丹羽大輔さん（53）によると、精神疾患は慢性化するケースが多いため、当事者が必要とする情報は医療の知識にとどまらない。学校や仕事、結婚といった生活上の悩みに本人や家族らがどう対応しているかについての記事のニーズが高いという。

そこで同誌は、当事者の体験談を集めることに力を入れ、これまでに4300余りの手記を掲載。さまざまな解決策や折り合い方の工夫などを読者に提供してきた。書店での販売はせず、コンボから直接会員に郵送する方式で毎月約1万部を発行している。

丹羽さんは「私たちは一貫して、病気を持っていても人生の方向性を自分で決め、自分の責任で歩むという考え方を広めようと努力してきた。次の10年もさらに充実した雑誌を作っていきたい」と話している。



世界初、他人のiPS移植 理研、目の病気に網膜細胞 共同通信 2017年3月28日

理化学研究所などのチームは28日、目の病気の患者に、他人の人工多能性幹細胞（iPS細胞）から作った網膜の細胞を移植する手術を実施したと発表した。他人のiPS細胞を使った移植は世界初。患者本人のものを使うより準備期間が短く、費用も安くなる利点がある。iPS細胞を使った日本発の再生医療の普及に向けた大きな一歩となる。

理研の高橋政代プロジェクトリーダーらが、神戸市立医療センター中央市民病院で臨床研究として実施した。「滲出型加齢黄斑変性」の60代男性に対し、iPS細胞から作った網膜細胞を含む溶液を注射針で目に注入。細胞が網膜に定着するのを待つ手法で移植した。

<元名大生の闇> 厳刑 微動だにせず 説諭に小さく「はい」 (上) 衝撃

中日新聞 2017年3月25日

無期懲役の判決を聞く名古屋大の元女子学生＝イラスト・浦道美紀



名古屋大の元女子学生（21）が殺人や中毒症状の観察願望から撲殺や劇物混入などの凶行を重ね、世間を震撼（しんかん）させた事件。名古屋地裁で24日、元学生に言い渡されたのは、少年事件としては厳しい無期懲役の判決だった。判決後、裁判長に「必ず社会復帰できると信じている」と説かれ、元学生は小さく「はい」とうなずいた。

「無期懲役に処する」

判決にも、元学生は微動だにしなかった。

だが、今月10日の論告求刑公判。これまで法廷で淡々と発言してきた元学生は、無期

懲役を求刑されると、顔を赤らめ、初めて動揺を見せた。直後の意見陳述では「反省や謝罪、償いを一生かけて考えていきたい」。その声は震えていた。

2週間を経て迎えたこの日、元学生は紺色のジャケットに黒のズボン、白いマスクを着け、髪は後ろで一つに結ぶポニーテール姿。法廷での様子は落ち着きを取り戻していた。

死刑判決以外では異例となる主文後回しとなった判決は、1時間半に及んだ。裁判長は「年齢相当の未熟さも犯行に影響した」と少年事件であることを考慮しつつ、「有期刑にするのは軽すぎる」と言及した。

これまでの公判で元学生について、高校時代の同級生は「人当たりが良くて、友達が多い印象」と証言した。

だが、幼少期から、元学生の胸の内には少年犯罪への憧れがあった。自身のツイッターに「少年犯罪って現役合格と同じ感じの輝きがある」と投稿。特に殺人にこだわり、妹には「未成年のうちに絶対殺（や）ってやる」とメールを送った。知人の森外茂子（ともこ）さん＝当時（77）＝を殺害したのは、その1カ月後。「少年」でいられる期間は、あと1年を切っていた。

毒劇物への興味も際立っていた。高校時代、劇物の硫酸タリウムに魅力を感じ、「瓶をうっとり眺めていた」という。人に使ってみたいという欲望が抑えきれず、同級生らにタリウムを投与。「症状が出て興奮した」と法廷で述べた。

判決で裁判長は「興味本位で身勝手な犯行」と断罪し、「自らの行為や被害結果の大きさを受け止めておらず、反省の深まりは全く足りない」と指摘。一方で、判決言い渡し後には、裁判員の思いを乗せた“メッセージ”を送った。

「刑務所で事件を振り返って、被害者らに思いを巡らせ、罪を償ってほしい。あなたには、足に不自由がある人の義足代わりとなるような、知的能力の高さがある。希望を持って知恵を絞って努力すれば、きっと障害を克服することができます。あなたの更生が、償いになります」

22回に及ぶ公判で浮かび上がった名古屋大の元女子学生の「闇」。事件を防げなかった社会は判決から何を学び、同様の悲劇を食い止めていくのか。犯行に至るまでの元学生と社会とのつながりや矯正治療の現場を検証する。

名古屋大の元女子学生による事件の経過

2010年頃		神戸の児童殺傷事件の話聞き、猟奇的な殺人事件を調べ始める
2011		人を殺すことや、毒劇物の症状観察に興味生じる
2012	4～5月頃	タリウムなど劇物を使った殺人事件のホームページを閲覧。劇物の所持を父親や警察から注意される
	5月27日	仙台のカラオケ店で小中同級生の少女のメロンソーダにタリウム混入
	5月28日	高校の教室内で同級生の少年のペットボトルにタリウム混入
2013	7月19日	高校の教室内で少年のペットボトルに2度目のタリウム混入
	3月	仙台の私立高校卒業
	4月	名古屋大入学。名古屋市昭和区のアパートで一人暮らし
2014	8月30日	実家帰省中、近くの民家の玄関付近に火炎瓶を置く
	12月7日	アパート自室で森さんを殺害。翌日、実家へ帰る
	12月13日	8月と同じ民家の郵便受けに火を付ける
2015	1月27日	森さんの遺体が自宅浴室から見つかり、殺人容疑で逮捕
	5月12日	名古屋地検の精神鑑定が終了し、「責任能力あり」と判断
	5月15日	2人にタリウムを飲ませたとされる殺人未遂容疑で再逮捕
	6月5日	民家の放火未遂、殺人未遂容疑で再逮捕
2016	6月16日	名古屋地検が殺人や殺人未遂などの非行内容で家裁送致
	9月29日	「責任能力なし」の家裁鑑定も踏まえ、名古屋家裁が逆送決定
	10月8日	名古屋地検が殺人や殺人未遂罪などで起訴
2017	1月16日	名古屋地裁で裁判員裁判始まる。弁護側は無罪主張
	3月10日	検察側が無期懲役を求刑
	3月24日	無期懲役の判決

※法廷での発言や証拠に基づく。太字は起訴内容

＜元名大生の闇＞見過ごされた異変 (中) 支援 中日新聞 2017年3月26日

「人の死や少年犯罪への興味の深まりには、発達障害が一定の影響を与えていた」

24日、名古屋地裁で言い渡された名古屋大の元女子学生(21)への判決。山田耕司裁判長は、高校の同級生ら2人に劇物の硫酸タリウムを飲ませ、知人女性を殺害した事件の背景をこう指摘した。

検察、弁護側ともに認めた元学生の発達障害。公判では、犯行への影響が大きな争点となった。

元学生が2015年1月に訪れた名古屋市内の発達障害者支援センター。既に知人女性を殺害した後で、愛知県警に逮捕される前日だった



小中学校の授業中、突然いすの上に立ち上がる。ギロチンの絵を頻繁に描き、過去の凶悪な少年事件を「私と同じ年ですごい」と称賛する。幼少期からの問題行動が次々と明らかになり、あらためて事件の特異性を印象づけた。

元家裁調査官で京都工芸繊維大の藤川洋子特定教授は「発達障害の人が犯罪を起こしやすいというデータはない」と強調した上で「だが今回は、元学生の障害を早めに発見して対処していれば、事件は防げたかもしれない」と指摘する。

しかし、公判で浮かび上がったのは、周囲が異変に気付きながらも、社会の支援が届かなかった現実だ。

元学生は中学1年のころ、不登校や不眠が続き、児童精神科を受診したが、発達障害や精神疾患の診断は下されず、通院や治療にはつながらなかった。

証人出廷した母親によると、通っていた仙台市の私立高校はタリウム事件後、元学生の犯罪や薬品への強い執着を把握。母親を呼び出して面談するなどしたが、事件との関連を積極的に調べたり、医療機関の受診を勧めたりはしなかった。

藤川氏は不登校時の受診について「障害の兆候を見つける好機だったが、発達障害への理解や診断能力は医師によってばらつきがある。特に元学生のように知的能力が高いと見極めが難しい」と指摘。高校の対応にも「受験や学業優先の事なかれ主義で対応していな

かったか省みる必要がある」と話す。

元学生は名大1年だった2014年9月の帰省時、母親と仙台市の発達障害者支援センターを訪問。簡単な助言を受け、1人暮らしをしていた名古屋市のセンターに行くよう勧められたが、医療機関への通院にはつながらなかった。15年1月には同市のセンターで「人を殺してみたい願望がある」と打ち明け「すぐに精神科へ行くように」と助言されたが、既

名古屋大の元女子学生の言動

小学5、6年	ギロチンなどの絵を描くように。担任の給食にホウ酸を入れようとする
中学1年	夏休み明けから体調不良で一時不登校に。児童精神科医が心因性の症状と診断
中学3年	神戸児童殺傷事件の話をもとに母親から聞き「すごい」。猟奇的な殺人事件を調べ始める
高校1年頃	殺人や毒劇物の症状観察に興味が生じ、サバイバルナイフやモデルガン、薬品を購入。「(犯罪を)やるなら少年法で守られている間に」と同級生に話す
高校2年	硫酸タリウムなど劇物を使った殺人事件のホームページを閲覧する。劇物の亜硝酸ナトリウムの所持を父親や警察から注意される(4～5月頃) 高校の同級生ら2人にタリウムを飲ませる(5～7月)
大学1年	実家近くの民家の玄関付近に火炎瓶を置く(8月) 仙台市の発達障害者支援センターを訪問(9月) 森外茂子さんを自宅で殺害。6日後、実家近くの民家に火を付けようとする(12月) 名古屋市の発達障害者支援センターを訪問(1月)

※法廷での発言や証拠に基づく

に女性を殺害した後だった。

「他人の内面に対し共感性がなく、社会的なコミュニケーションに障害がある。極めて限られた領域に関心を抱く傾向もある」。判決は、元学生が精神鑑定結果に触れる中で発達障害の一般的な特性を指摘した。

発達障害者の家族と支援者らでつくる東海地方の団体の女性役員（68）は「こうした事件が起きるたびに『発達障害が犯罪に結び付く』という誤解が広まらないかと心配になる。一人一人の特性が違い、求める支援も多様であることを知ってほしい」と話す。

ある発達障害者支援センターの担当者は「発達障害者が社会で生きていくには周囲の理解が欠かせない。なぜ何らかの支援につながらなかったのか、検証が必要」と指摘した。

発達障害 脳の発達が生まれつき通常と異なるため、社会生活に困難が出る障害。言葉の遅れがあり対人関係が苦手などの自閉症や、言葉の遅れを伴わないアスペルガー症候群、学習障害（LD）などに分かれ、幼児期から症状が現れることが多い。発達障害の可能性のある子どもは公立小中学校の通常学級に6・5%いるとの国の推計もある。2005年施行の発達障害者支援法で各地に支援センターが設立され、相談事業や関係機関との連携を進めている。

＜元名大生の闇＞刑務所で治療 限界（下） 更生 中日新聞 2017年3月27日
鉄格子のかかった窓の近くを、看護師や刑務官が行き交う＝愛知県岡崎市の岡崎医療刑務所で



「責任を自覚させ、刑務所での受刑を通じた償いを実効性のあるものとするべきだ。そのため、障害の状況に応じた適切な療育、治療を最大限講じてほしい」

名古屋大の元女子学生（21）に対する24日の名古屋地裁判決は、発達障害と双極性障害（そううつ病）の犯行への影響を認め、矯正治療について異例の言及をした。さらに「一定の治療は、医療刑務所を含む枠組みで対処可能である」とも指摘した。

岡崎医療刑務所（愛知県岡崎市）は、中部地方で唯一の医療刑務所。重い精神障害がある男性受刑者ら135人が生活している。

「幸せは、雲の上にい」。鍵付きの扉の奥から、野太い歌声が漏れる。小さな部屋では緑色の作業服を着た中年男性がマイク片手に立ち、往年の名曲「上を向いて歩こう」を熱唱していた。その傍ら、別の男性がただ宙を見つめ、もう一人は赤い色鉛筆でバスをひたすら描いている。

「彼らは自分の状況をあまり理解できていない。互いのコミュニケーションも図れない」と職員は言う。カラオケや塗り絵は治療の一環で、ほかに薬物療法やカウンセリング、窯業などの芸術療法もある。精神科医2人が常勤し、ケアは手厚い。

ただ、全国に4カ所ある医療刑務所のうち、精神障害者を収容するのは岡崎と北九州（福岡）の2カ所。女性受刑者に対応するのは北九州のみだ。

ある矯正関係者は「医療刑務所に収容されるのは、会話が全く通じないなど集団生活ができない人」といい「狭き門」と明かす。その上で、元学生が収容先は「一般の女子刑務所だろう」と推測する。

女子刑務所の笠松刑務所（岐阜県笠松町）では、445人が縫製や部品製造などに従事している。

所内の工場には50人ほどがひしめき合って座る。言葉を発する者はなく、机の上のつまようじを一つずつ丁寧に袋に詰めていく。食事や入浴時間など以外、朝から夕方まで作業する。

医療刑務所ではないにもかかわらず、精神障害のある受刑者は167人と全体の4割弱を占める。だが、対応は非常勤の精神科医による診察と投薬のみ。受刑者同士の意見交換

や作文発表、DVD鑑賞などを通じて、被害者の視点を取り入れ、罪の大きさを自覚させるプログラムを受けられるのは、どの受刑者も半年間だ。

「受刑者の人数が多く、一人一人に十分な治療は行えない」。別の矯正関係者は、女子刑務所での対応には限界があると指摘する。「そもそも一般の刑務所は作業して服役するところ。病院ではないから治療を主にはできない。そこまでやるには人手が足りない」

受刑者らの処遇に詳しい龍谷大法科大学院の浜井浩一教授は、更生に向け一人ずつに教官や医師、看護師が付いて矯正教育や治療を行う医療少年院なら、「障害をコントロールする訓練ができたのに」と指摘。「元学生を刑務所に収容しても、殺人願望は変わらない可能性が高い」と懸念する。

イタリアや北欧では受刑者の社会復帰を重視し、刑務所を更生目的と捉える動きが進んでいる。だが、「日本の刑務所はあくまでも懲罰が主な目的。本人の障害の特性を理解し、家族や医師らみんなで考えることが大切だが、想定はしていない」といい、「刑罰の在り方を見直すべき段階に来ている」と強調した。（この連載は杉藤貴浩、天田優里が担当しました）

刑務所 実刑判決が確定した受刑者を収容する。全国に刑務所62カ所、刑務支所8カ所がある。うち医療刑務所は岡崎、北九州、八王子（東京）、大阪の4カ所で、八王子、大阪は終末期医療に対応している。女子刑務所は笠松、和歌山、栃木など10カ所。ほかに少年刑務所が7カ所あるが、成人を含めた男性が対象。

「ボッチャ」県協会を設立 障害者スポーツ指導員ら 徳島新聞 2017年3月27日
県ボッチャ協会を設立した永井会長（左から2人目）ら＝徳島市の県立障がい者交流プラザ



徳島県内の障害者スポーツ指導員やトレーナーら10人が、障害者スポーツ「ボッチャ」の県協会を立ち上げた。県内各地で講習会を開くなどして競技の普及を図るとともに、競技者を支援。多くの障害者の社会参加につなげる。

ボッチャは重度脳性まひ者や四肢重度機能障害者のために考案された球技。団体戦は3人ずつの2チームが対戦する方式で行われ、目標球に向かってボールを投げて距離が近い方に点が入る。昨年9月のリオデジャネイ

ロ・パラリンピックでは、日本代表が銀メダルを獲得した。

県協会は県障がい者スポーツ協会と連携して県内各地で講習会を開催。ルールを簡素化した「レクリエーションボッチャ」を紹介するなどして、競技人口を増やしていく。本格的に競技に取り組む人がいればサポートし、将来的には、パラリンピックを目指す選手の発掘や育成にも取り組むという。

永井明人会長（46）＝徳島市南田宮1、治療院経営＝は「多くの人にボッチャを知ってもらいたい。世界を目指す選手も出てきてくれたら」と話す。メンバーの一人で競技歴1年の村上哲史さん（51）＝小松島市中田町新開＝は「協会、選手としてどこまでできるか楽しみ」と意気込んでいる。

問い合わせは協会<メールtokushimabocci@gmail.com>。

